

当面の大学の課題

大 谷 實

戦後、特に昭和三〇年代以降、人口の増加と進学率の向上に伴い、受験地獄とよばれる現象があらわれた。そのため、私立大学は数多く新設されるとともに、既存の大学の大半は、学生数を増やし規模を拡大してきた。同志社大学もその例外でないこと無論である。にもかかわらず本学への入学は、かなり困難であり、この傾向は、今後も当分はつづくことが予想される。

しかし、昭和六〇年度以降になると、事態は、かなり変化してくるであろうことは、十分予測できる。

第一に、六〇年度をピークに高校三年生の人口は、急激に減少してくる。

第二に、ここ一、二年に、はっきりあらわれてきていることは、進学希望者の割合が低下しつつあるということである。第三に、専修学校、各種学校が増加しつつあるとともに、地方の国立大学が量的にも質的にも充実されつつあり、昭和六〇年頃に、ほぼ整備が完了する。

要するに受験地獄は、かなり緩和され、今日のように試験さえ実施していれば、優秀な受験生が

集ってくるといった現象は、あまり期待できないのである。

たしかに、同志社大学の研究・教育体制は、量的拡大にともなう質的に向上してきたことは疑いない。しかし、他方、伝統ある他の大学の多くがそうであるように、同志社大学の独自性ないし特色は、年々うすらいできていることも否定できない。無論、大学は学問の研究とその伝授を目的とするのであるから、その点で国公私立の各大学間に差異のありようがない。要は、優秀な研究スタッフと、高い水準の教育こそ第一の目標でなければならぬということである。したがって、この点の自己点検と、不断の改善への努力を怠ってはならないであろう。また、教育環境、条件も魅力あるものにする必要がある。

しかし、これらを土台としながら、同志社固有の研究・教育がなければ、真に有為な人材を大学に迎え入れ、社会におくりだすことは困難になると思われる。ここで、再び、いやおうなしに同志社立学の精神に立ちかえらざるをえないのである。

たしかに、新島精神という良心教育という理念は、抽象的であり、また、それに対する現代的な対応はむずかしい。しかし、この原点に立ち戻って、確固とした教育・研究理念を樹立することは、焦眉の急を要する課題というべきであろう。

(同志社大学長)

校長就任に思う

上田 堅一郎

本年四月、浦野前校長の任期満了のあとを受け、同志社高等学校の校長の責を負うことになって、はや一学期が経過いたしました。とにかく無我夢中で過した一学期間でした。夏休みに入っ
て、はっと一息つき、就任当初の緊張感もややほぐれたところで、改めて校長就任ということ省みて
みますと、気持ちの上で若干の余裕が感ぜられる反面、就任当初よりも更に一層その責任の重さ
というものが感ぜられる今日この頃であります。元来、私は至って気の小さい性格で、およそ事をな
すに当ってなかなか決断のつきにくい方なので、校長としての資質には程遠いものであることは私
自身が最もよく分かっております。従って、果して校長の重責に耐え得るか否かいささか気がかり
ですが、就任がきまったとき、私の所属する京都丸太町教会の田中牧師からいただいた励ましの言
葉『すべて祈って事に当るように』を心の支えとし、また、高等学校の教職員の方々の温かい協力
と支えを信頼して、私なりの微力をつくして行きたいと念じております。

さて、このたび、同志社時報より校長就任の言葉を書くようにとの御依頼を受けたわけですが、

正直いっていささか困っております。

校長に就任して最初の教職員会議において私は一言だけ、『初心に帰って頑張りたい』と挨拶をいたしました。それは、はじめから明確な、施政方針といったようなものを持ち合わせているわけではなく、今後直面するであろう一つ一つの問題に対して、新鮮な気持ちで誠実にぶつかってゆきたいという心情の表明のもりでした。現在、就任の言葉を書けと言われても、それ以外には書きようがありません。しかしそれでは余りに無責任に過ぎるかと思いますので、私の教師としての初心を振り返ってみて、いささか所感を述べ、御批判を仰ぎたいと思います。

もう二十五、六年も前のことになりますが、私が同志社高校に奉職して数年経った時のことだったと思います。私は一通の手紙を受け取りました。差出人の名前は書いていませんでしたが、文面を読むと、差出人は本校の卒業生—というよりも正確には中途で退学した生徒。それも何か問題を起して退学になった生徒のようでありました。手紙によると、自分は学校を辞めてからは心機一転して真面目になっているからよそごとながら安心してほしい。という内容のことに加えて、先生も同志社の卒業生なんだから、同志社高校で骨を埋める覚悟で頑張って下さい。という意味のことが心をこめて書かれてありました。私はその手紙に接したとき、何か今まで自分が迷っていたことに一条の光が射し込んだような気がしたことを覚えております。ある意味ではこの一通の手紙が私の一生に決定的な影響を与えたと言えるかと思えます。

私は教育というのは、教師から生徒への一方的な作用としてではなく、むしろ教師と生徒との相互作用によってなされると思います。

単に教師が生徒を教えるだけではなく、教師自身がその事を通して生徒から教えられることがい

かに多いかということを感じます。教師は教える者、生徒は教えられる者といった固定した考え方からは本当の教育は生まれません。勿論、専門的な知識の所有量からいえば教師の方が圧倒的に多いのですから、従ってまたその知識を前提としての判断力は教師の方が勝るのは当然でしょう。その意味ではまさに教師は教える者、生徒は教えられる者に違いありませんが、それらの知識の受け入れ方、ひいては生き方の問題にまでは、この固定した考え方は通用しないと思います。教育とは本来そのような静的なものではなく、もっと動的なものではないかと思えます。つまり、生徒の前に立った教師の存在が生徒の意識に変化を与える。そしてそのことによって、教師自身も変革される。更にそれが生徒の成長を促します。——教育とはそのような営みではないでしょうか。

(同志社高等学校長)

香里の今昔

北川 博 造

香里の中学・高等学校は、その沿革をたどると、昭和十五年（一九四〇）の偕行社中学の設立にまで遡らねばならない。この時期大阪第四師団に寄せられた公益献金四五万円・後援寄付金三〇万円の計七五万円が学校設立の基金になったという。

昭和十五年と言えば、太平洋戦争の開戦の前年であり、暗雲が日本を、いや全世界を覆っていた

頃である。翌年二月この偕行社中学は、軍人の子弟教育を目的とする山水育英会の助成金を得て校名を「山水」と改称している。その名の由来は、「海行かば水漬く屍、山行かば草生す屍、大君の辺にこそ死なめ、顧みはせじ。」の古歌にあるというから、もって当時の校風を知るに足るであろう。正式には東京の第一山水中学校（現・桐朋学園）に対して、第二山水中学校と称した。校長は陸軍少将であったという。

やがて昭和二〇年（一九四五）の敗戦と共に、社会の情勢は一変し、更に昭昭二三年（一九四八）学制の改革に伴い、新制の中学・高等学校となって財団法人香里学園と改称するに至る。校名は三たび變って、香里中学・高等学校となる。そして昭和二六年（一九五一）遂に同志社と合併し、同志社香里中学・高等学校として新しい道を行くことになる。このように香里の学園は、同志社傘下の他の諸学校とは、よほどその沿革を異にしている。合併当時の生徒数は、高等学校三五五名、中学三五九名、計七一四名、専任教員二七名、職員十五名に過ぎなかった。建物、すべて木造で、本館や中学・高校の校舎、講堂、体育館等が起伏の多い校地に散在していて、屋根のある長い渡り廊下でつながれていた。それはなかなか趣きのある風情で、いかにも由緒ある古い学校といった感があった。学校の回りにも丘や池が多く、近くには人家はほとんどなくて竹藪と田畑に取り巻かれていた。私が始めて赴任した昭和三年頃にも、まだ校門の近くで野兎の走るのを目にしたこともある。夜になると、時にはタヌキが出て来ると聞いたこともあった。また天文台が出来て夜泊り込んでいると、火影をしたって回りの雑木林から、カブト虫がわんさと飛込んで来たもの。一頃は、この辺一帯はカブト虫の名産地だったらしい。

同志社に合併されてから、凡そ三〇年、学校を取り巻く環境も、また学校そのものも、大きな変